博士学位論文審査要旨

２００９年6月１０日

論 文 題 目： 認知症家族介護者における家族会参加に伴う共感的人間関係のメカニズムに関する研究
学位申請者： 佐分 厚子
審 査 委 員：
主 査： 社会学研究科 教授 黒木保博
副 査： 社会学研究科 教授 木原活信
副 査： 岡山県立大学大学院保健福祉学研究科 教授 中嶋和夫

要 旨：

本論文は，家族介護者の身体的・精神的・社会的に良好な状態―ウエルビーイング（well-being）―を目指した支援体制の在り方について論じている。特に、介護者家族会などのセルフヘルプ・グループの特性と，家族会参加の家族介護者にもたらされる効果との関連を明らかにすることを目的としている．

序論では，研究の意義を明確にするために，社会的背景と学問的課題，関連の理論を検討し，研究の課題を立てている．まず，家族介護者のウエルビーイングに関する概念やその関連要因についてレビューした結果，セルフヘルプ・グループとの関連の検討が残されていたことを示した．すなわち、セルフヘルプ・グループの特性である共感的人間関係が家族介護者に及ぼす影響に関する実証的領域が十分明らかにされていなかったことから，「共感」の概念を先行研究から整理し，人間存在への信頼に基づいたロジャーズ（Carl Rogers）の理論に基づき、家族介護者支援における「共感」の概念を導いている．次に、セルフヘルプ・グループの特性である共感的人間関係が家族介護者に及ぼす影響を解明するため，本研究で取り組む次の３つの課題を立てている．

課題１：共感的人間関係のメカニズムの解明（本論第２章，第３章 ）
課題２：共感的人間関係と家族会継続意図（本論第４章）
課題３：共感的人間関係と精神的健康との関連（本論第５章）

本論では，課題の解明のためにロジャーズの理論を援用しつつ、先行研究との関連の整合性を考慮した仮説を立て、３つの仮説モデルを構成している。これに構造方程式モデリングを用いて仮説モデルデータの適合度を判断し，家族介護者支援への示唆を考察した．

まず，課題１「共感的人間関係のメカニズムの解明」のために，家族介護者の家族会参加による「共感」と介護への「適応」との関連モデルを検証した．この結果，仮説が依拠するロジャーズの理論を支持するものであり．セルフヘルプ・グループの援助効果が実証的に支持された．

課題２では，認知症は長期にわたる介護が必要とされることを考慮し，家族介護者の継続的支援に焦点を当て，「共感的人間関係と家族会継続意図との関連」の解明のために，家族介護者の家族会参加による「共感」，介護への「適応」と「家族会継続意図」との関連モデルを検証した．結果、介護者家族会における「共感的人間関係のメカニズム」と「家族会継続意図」との関連は，「共感」が「適応」を促進し，「家族会継続意図」に関連していることを明らかにした．これらのことは，認知症の長期にわたる介護を考慮するならば，継続的支援のためにモデルとして応用が可能であると推察される．

課題３では，「共感的人間関係と精神的健康との関連」の解明のために，家族介護者の家族会

参加による「共感」，介護への「適応」と「精神的健康」の関連モデルを検証した．結果、介護者家族会における「共感的人間関係のメカニズム」と「精神的健康」との関連は，「共感」が「適応」を促進し，低いパス係数ながら良好な「精神的健康」に関連していることを明らかにした．

このように，3つの仮説モデルの検証により課題1・課題2・課題3を解明したことによって，セルフヘルプ・グループの特性である共感的人間関係と，それが影響を及ぼすと仮定した家族介護者の「適応」と，ウエルビーイングの指標のひとつと仮定した「精神的健康」との関連とそのメカニズムを説明し，これらの結果から，家族介護者支援に関する要因を考察している．

なお、今後の研究課題としては、第一に、「共感」と「適応」の関連が影響を及ぼす「精神的健康」を検討したが、さらに効果として生活の質の向上や、WHO の健康の定義に示された概念であるスピリチュアリティの安定や充足について研究を深めること、第二に、検証された「共感」と「適応」の仮説モデルを関連する他領域のセルフヘルプ・グループにおいても検証することである。

以上、本研究において，社会福祉の目的である家族介護者支援を目指して，「共感」という概念を家族介護者支援の価値観から捉え，家族会などのセルフヘルプ・グループの存在が，今後の高齢社会を支える社会のファクターとなることを実証的研究にて明らかにすることができた。

よって、本論文は、博士（社会福祉学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

総合試験結果の要旨

２００９年6月１０日

論 文 題 目：　認知症家族介護者における家族会参加に伴う共感的人間関係のメカニズムに関する研究
学位申請者：　佐分　厚子
審 査 委 員：
　主　査：　社会学研究科　教授　黒木保博
　副　査：　社会学研究科　教授　木原活信
　副　査：　岡山県立大学大学院保健福祉学研究科　教授　中嶋和夫

要　　旨：

2009年６月10日（水）１６時４５分から９０分にわたり、申請者による公開学術講演会を臨光館212にて行った。引き続き、１８時３０分より、約１時間にわたり、上記３名の主査・副査による口頭試問を行った。

講演会においては、申請者は学位申請論文内容に関する講演を行い、本論文の独自固有性を明快に披露し、体系的かつ実証的研究による仮説の有効性を論証した。公開講演会出席者からの質問に対しても的確な回答をした。

また口頭試問においても、審査委員からの学位申請論文内容と社会福祉学に関する質疑に対して的確に回答し、豊かな知識、学力を有していることを証明した。また同時に、論文作成に関する外国語能力(英語)も充分に保有していることを確認した。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博 士 学 位 論 文 要 旨

論 文 題 目： 認知症家族介護者における家族会参加に伴う共感的人間関係のメカニズムに関する研究

氏　　名： 佐分　厚子

要　　旨：

本論文は，家族介護者が身体的・精神的にも社会的にも良好な状態―ウエルビーイング（well-being）―を目指した支援体制の在り方についての示唆を得ることをねらいとして，介護者家族会などのセルフヘルプ・グループの特性と，参加している家族介護者にもたらされる効果との関連を明らかにすることを目的とした．

序論では，研究の意義を明確にするために，社会的背景と学問的課題，関連の理論を検討し，研究の課題を立てた．まず，家族介護者のウエルビーイングに関する既存の文献を基礎に，家族介護者のウエルビーイングに関する概念やその関連要因についてレビューし，セルフヘルプ・グループとの関連の検討が残されていたことを示した．次に，セルフヘルプ・グループの特性に関する既存の文献をレビューした結果，セルフヘルプ・グループの特性である共感的人間関係が家族介護者に及ぼす影響に関する実証的領域が十分明らかにされていなかった．これらのことから，「共感」の概念を先行研究から整理し，人間存在への信頼に基づいたロジャーズの理論に基づき家族介護者支援における「共感」の概念を導いた．そして，先行研究で明らかにされていないセルフヘルプ・グループの特性である共感的人間関係が家族介護者に及ぼす影響を解明するため，本研究で取り組む次の３つの課題を立てた．

課題１：共感的人間関係のメカニズムの解明（本論第２章，第３章 ）

課題２：共感的人間関係と家族会継続意図（本論第４章）

課題３：共感的人間関係と精神的健康との関連（本論第５章）

本論では，課題の解明のためにロジャーズの理論を援用し，先行研究との関連の整合性を考慮し仮説を立て，３つの仮説モデルを構成し構造方程式モデリングを用いて仮説モデルのデータへの適合度を判断し，家族介護者支援への示唆を考察した．

まず，課題１「共感的人間関係のメカニズムの解明」のために，家族介護者の家族会参加による「共感」と介護への「適応」との関連モデルを検証した．仮説果モデルは，「共感」（下位概念：他者からの肯定的配慮，他者への肯定的配慮，他者の受容）と「適応」（下位概念：認知症の家族員の理解，自己一致，介護の見通し）を要素に構成した．前記仮説モデルのデータへの適合性は構造方程式モデリングを用いて検討した．仮説モデルのデータへの適合度は，CFI=0.921，RMSEA=0.070 であった．共感から適応への係数は正の方向で 0.79 であり，統計学的に有意な水準を満たしていた．このことは，家族会参加による「共感」と家族介護者の「適応」の関連は，「共感」から「適応」へと向かうという仮説が支持されたことを意味している．この結果は，仮説が依拠するロジャーズの理論を支持するものである．また，従来，セルフヘルプ・グループ研究で言及されてきた「同じ問題を抱えている仲間と出会い，問題としていた体験を分かり合えるような経験が，個人の成長や変化に影響を及ぼす」というセルフヘルプ・グループの援助効果が実証的に支持された．

続いて，さらに調査対象者を増やし，家族介護者の家族会参加による「共感」と介護への「適応」の２次因子モデルの検証を行った．仮説モデルのデータへの適合度は，CFI=0.932，RMSEA=0.060 であった．「共感」から「適応」への係数は正の方向で 0.74 であり，統計学的に有意な水準を満たしていた．このことは，家族会参加による「共感」と家族介護者の「適応」の

関連は，「共感」から「適応」へと向かうという仮説が支持されたことを意味している．また，「共感」と「適応」のそれぞれの潜在変数と観測変数との関連は高く，それぞれの潜在変数の構成概念の妥当性が検証された．

課題２では，認知症は長期にわたる介護が必要とされることを考慮し，家族介護者の継続的支援に焦点を当て，「共感的人間関係と家族会継続意図との関連」の解明のために，家族介護者の家族会参加による「共感」，介護への「適応」と「家族会継続意図」との関連モデルを検証した．この関連モデルは，「共感」（下位概念：他者からの肯定的配慮，他者への肯定的配慮，他者の受容）と「適応」（下位概念：認知症の家族員の理解，自己一致，介護の見通し），「家族会継続意図」を要素に仮説モデルを構成した．仮説モデルのデータへの適合性は構造方程式モデリングを用いて検討した．その結果，仮説モデルのデータへの適合度は，CFI=0.90，RMSEA=0.066 であった．「共感」から「適応」への係数は正の方向で 0.98，「適応」から「家族会継続意図」への係数は正の方向で 0.68 であり，統計的に有意な水準を満たしていた．このことは，介護者家族会における「共感的人間関係のメカニズム」と「家族会継続意図」との関連は，「共感」が「適応」を促進し，「家族会継続意図」に関連していることを意味している．これらのことは，認知症の長期にわたる介護を考慮するならば，継続的支援のためにモデルとして応用が可能であると推察された．

課題３では，「共感的人間関係と精神的健康との関連」の解明のために，家族介護者の家族会参加による「共感」，介護への「適応」と「精神的健康」の関連モデルを検証した．「家族介護者の家族会参加による共感，介護への適応と精神的健康の関連モデル」は，「共感」（下位概念：「他者からの肯定的配慮」，「他者への肯定的配慮」，「他者の受容」）と「適応」（下位概念：「認知症の家族員の理解」，「自己一致」，「介護の見通し」），「精神的健康」を要素に構成した．仮説モデルのデータへの適合性は構造方程式モデリングを用いて検討した．その結果，仮説モデルのデータへの適合度は，CFI=0.920，RMSEA=0.064 であった．「共感」から「適応」への係数は正の方向で 0.70，適応から精神的健康への係数は正の方向で 0.20 であり，統計的に有意な水準を満たしていた．このことは，家族会参加による「共感」と家族介護者の「適応」の関連は，「共感」から「適応」へと向かうという仮説が支持されたことを意味している．次に，「共感」「適応」と「精神的健康」の関連性においては，「適応」から「精神的健康」へのパス係数は正の方向で 0.20 となっていた．このことは，介護者家族会における「共感的人間関係のメカニズム」と「精神的健康」との関連は，「共感」が「適応」を促進し，低いパス係数ながら良好な「精神的健康」に関連していることを意味している．

以上，３つの仮説モデルの検証により課題１・課題２・課題３を解明した．これによって，セルフヘルプ・グループの特性である共感的な人間関係と，それが影響を及ぼすと仮定した家族介護者の「適応」と，ウエルビーイングの指標のひとつと仮定した「精神的健康」との関連とそのメカニズムを説明し，これらの結果から，家族介護者支援に関する要因を考察した．

今後の研究の課題として以下の２点が考えられる．第１に，本研究では「共感」と「適応」の関連が影響を及ぼす「精神的健康」を検討したが，さらに効果として生活の質の向上や WHO の健康の定義に示された概念であるスピリチュアリテイの安定や充足が考えられる．適切な倫理的配慮のもとで対象者を増やし検証することが望まれる．第２に，本研究で検証された「共感」と「適応」の仮説モデルは，他領域のセルフヘルプ・グループにおいても関連があると想定される．さらに調査を行うことにより，その関連を検証し，他領域におけるセルフヘルプ・グループの効果を説明することが期待できる．

今後の家族介護者支援の方向性として，序論第１章で述べたように，家族介護者は，自分の家族の介護という状況に直面し，これまでの生活と異なる問題や困難に困惑し，悩むことが多い．多くの家族介護者は介護という過重な労働によって身体的負担を感じ，自らも高齢の家族介護者が多く，身体的にも，精神的も，そして，経済的にも負担を感じている．これまでも，そして，

今後も介護保険制度による介護保険サービスの量的質的な向上は介護負担感の軽減に求められていることはいうまでもない．本調査では，家族介護者の精神的負担に焦点を当て、ウエルビーイングを目指し支援資源としての家族会に着目し，家族介護者の直面する介護の状況や負担に留まらず，人間存在に対する理解や人間の自己の在り様の捉え方に対する認識をもって「共感」という概念をもとに共感的人間関係の支援における意義が明確化したが，家族介護者のウエルビーイングを目指す支援の一部しか解明されてはおらず，今後，さらにその要因が明確にされることが必要である．

序論第 4 章の「共感」の概念で示したように，「共感」には人間の感情的側面だけでなく，どのような感情を共有し，理解するのかという価値の側面がある．人間関係が希薄化した現代社会においても「共感」が人間に及ぼす影響が少なくないと考えられ，「共感」が人々に及ぼす影響はどのような価値をもつのかを意識していく必要があると考える．また，「共感」を公共の場で議論するときには，議論が指し示す価値観が現れてくることを考慮する必要がある．本調査は，広い概念をもつ「共感」の中で，社会福祉の目指す価値を志向した一部を概念化し，現在の社会における家族介護者の認知症の家族員に対する家族の介護に対する認識を概念化した．その意味で普遍的な介護認識ではなく，現在の認知症の治療や専門職の介護のあり方を反映し，家族はどのような認識で介護に臨んでいるかということを示したことになる．本研究は，社会福祉の目的である家族介護者支援を目指して，「共感」という概念を家族介護者支援の価値観から捉え，家族会などのセルフヘルプ・グループの存在が，今後の高齢社会を支える社会のファクターとなるための考察を行った．